

自分に自信をもち、自己肯定感を高められるようにする支援について

不登校児童の状況

対象生徒は、小学校3年生までは年間7日程度の欠席日数だったが、4年生になり不安が大きく教室に入ることを拒むようになり、年間101日欠席した。4年生の途中からフリースクールにも、週1日程度通っている。5年生の5月から校内別室を開室して、10月までに31日（うち教室には4日）登校できるようになった。

具体的な取組

○一人1台端末の活用

一人1台端末を利用した校内別室と教室をつなぐオンライン授業をしたり、担任が別室に行き本人とのコミュニケーションを図ったりした。



○他の児童との関わり

校内別室を利用する児童と共に学習したり遊んだりするなど、他の児童と関わりをもてる機会を意図的に設定した。



○一人一人の学習状況に応じた支援

一人一人の学習状況に応じて、担任や別室指導員を中心にして指導にあたり、学習意欲が高まるようにした。



○居場所の提供

別室や教室等、自分の取り組む場所を選べるようにし、当該児童にとって最も快適な環境で過ごせるようにして、校内での居場所の提供に努めた。



成果

学校内に、自分が心地よく過ごせる場所ができ、登校日数が増えた。また、給食を教室付近で食べるなど、所属学級への意識も高まってきた。他の別室利用の児童と共に、折り紙を折ったり体を動かしたりすることもできるようになってきた。

課題

別室指導支援員による継続的な支援を実施すること。

学びの懸け橋となる校内別室の 設置・運用について



不登校児童の状況

対象児童は、5月末の運動会後に、登校を渋るようになった。当該児童の保護者は、児童が5学年に進級するに当たり、仲の良い友達と別のクラスになったことが直接の原因と考えている。学校は、当該児童の特性や、家庭環境も強く影響しているとの認識である。

具体的な取組

○校内別室の設置

前年度から試行する校内別室を、校内別室指導支援員の配置を機会として、正式に設置した。

- ・自宅と教室をつなぐ踊り場としての位置付けで無理なく登校を促した。
- ・支援員を組織化し、複数、常駐した。

○段階的な教室復帰の手だてを提示

状況の異なる4人の児童に個に応じた支援を柔軟に図った。

- ・いつ登下校してもよいこととした。
- ・「雑談」「塗り絵・工作」「読書」から「プリント」「オンライン参加」「給食」「教室参加」から選択できるようにした。
- ・休み時間や放課後の交流を促した。

○問題解決型校内委員会の定期開催

当該児童に関わる教職員が集まって、登校しぶりの解消に向けた方策を検討した。

- ・学期ごとに、その開始前日に保護者と面談し、支援方針の合意を図った。
- ・SCやSSW、巡回相談心理士が参画する校内委員会を隔週開催して、合理的配慮の在り方を検討した。
- ・他の児童の把握も行った。

○支援日誌の共有

支援員が作成する「支援日誌」の記録に、関係職員が毎日必ずコメントした。

- ・活動記録に留まらず、支援員と担任がそれぞれの立場で当該児童の行動の見解及び対応策を具体的に共有した。
- ・校内別室の他の児童との関わりについて、記録を基に、パーティション活用などの支援に反映した。

成果

支援員の支援が、当該児童の自己決定を促し、教室で過ごす時間が増えた。

また、当該児童が、自分の言動を内省するようになった。

課題

校内別室を利用する児童同士の交流の配慮を行うこと。

多くの教職員が関わりながら、全ての生徒に教育支援を

不登校生徒の状況

対象生徒は、人前で発表することが苦手で、グループ活動や班での発表がうまくできない。教室に入ることができなかつたり、途中で泣き出してしまつたりすることがある。教室で学習できるよう情緒の安定を図ったり、学習支援を行ったりしている。別室での対応が必要な場合は、養護教諭、SC、SSW、校内別室指導員と連携している。

具体的な取組

○学習支援の取組①

- ・苦手意識の高い教科や気持ちの不安定さから、授業に入りたくないときに支援員が寄り添い、学習支援を行う。
- ・日常における生徒理解を深めるために授業観察や学習支援を行う。

○学習支援の取組②

- ・学力向上に向けて、家庭学習の定着、自学の力を付けるねらいとして、自主学習ノートの取組を推進している。毎朝、職員室前のかごに提出された自主学習ノートに支援員がコメントを記入する。
- ・学期末に「頑張り賞」にて表彰する。



○特別支援教育委員会による支援会議

- ・毎週1回定例の校内委員会を開催する。
- ・要支援生徒について情報共有を行う。
- ・独自のアセスメントシートを活用し、生徒目線での困り感を把握し、解決方法を検討し実践する。
- ・全校状況把握のための一覧表を作成し、見通しをもった支援を検討する。

○校内別室の活用

- ・今年度から校内別室指導支援員による別室指導を開始した。利用時間は、一日に1時間というルールで限られた時間だが、話をしたり、自学に取り組んだりして落ち着く居場所として利用している。

成 果

- ・支援が必要な生徒の一人一人の課題に応じて、情報共有を徹底しながら、早期対応ができた。
- ・居場所があることで、気持ちの切り替えや落ち着けるようにするなど自身をコントロールする力の向上が見られた。
- ・支援員が多くの生徒に対応できるようになった。

課 題

様々な外部人材が連携していることにより組織的な対応力が向上しているため、今後も継続していく。